

リン奏者だが、彼は自身のクインテットのメンバーや周辺の人数など、多くのブルーグラス系のミュージシャンをジャンゴ＝クラッペリの音楽に引き寄せてもいる。トニー・ライスやマーク・オコナー、ダロール・アンガー、マイク・マーシャルら、グリスマン・クインテットに在籍したメンバーたちは、クインテット独立後に組んだそれぞれのグループで、さらに多くのジャンゴ・フォロワーを生み、80年代を迎えるまでにブルーグラス・ルーツのアコースティック・シーンでは、ジャンゴ＝クラッペリの音楽が半ば常態化していた。この流れは、今日コンテンポラリー・ジャズ界で人気のバンジョー奏者、ペラ・フレックや、若手実力派No.1グループと目されるニッケル・クリークの音楽にまで達している。

本国のフランスでは、ジャンゴのホット・クラブ5重奏団でリズム・ギターを務めていたバロ・

フェレがミュゼットのスタイルで多くのレコーディングを残したり、先に魅れたクリスチャン・エスクーデら、ジブシー・コミュニティ出身のジャズ・ギタリストが、ジャンゴのスタイルを継承し、コンテンポラリーなスタイルへと発展させてきた。そうした脈々としたジャンゴの音楽の継承が、今日、ジブシー・コミュニティ内部の優れたプレイヤーたちにもスポットライトを当てている。ジブシー・コミュニティを舞台にした映画を撮り続けているトニー・ガトリフが監督した新作『僕のスウィング』で、マヌーシュ・スウィングのギタリスト、チャボロ・シュミットがフィーチャーされて、大きな話題になっていることもそのひとつだ。マヌーシュとはフランス北部からベルギー、オランダ寄のジブシーを指す。つまりジャンゴはマヌーシュであったわけで、シュミットにはそのジャンゴの生み出したスウィング・スタイルが、当

時の香りをそのままに受け継がれており、彼の演奏からは、濃厚な音楽の血脈を感じることができる。

一方でジャンゴのフォロワー・グループは、世界的な規模で登場している。ジャズ・サーキットで最も高い評価を得ているオランダのジブシー・コミュニティ出身のローゼンバーク・トリオ、テキサスを拠点にカントリー・ルーツとジブシー・スウィングの共通項を実証する実力派のホット・クラブ・オブ・カウタウン、アメリカン・テイストな粋なスウィングをジャンゴ・スタイルで演奏するホット・クラブ・オブ・サンフランシスコ、そして日本でも東京ホット倶楽部バンドがキャリアの長い活動が続けている。5重奏団の誕生以来、今ではもう70年近くを数えるジャンゴ・ラインハルトのスウィングが、かくも長きにわたって魅力的であり続けるのは、もちろんその確立した独創性によっている。

ALBUM GUIDE 文：宇田和弘

ジャンゴ・ラインハルトのレコーディングをコレクションするとすると、いやもう、これは難題中の難題。CDは山ほど出ているので、まず何から手を出すか、よほどの上級者でもない限り、迷方に陥れるはずだ。今日までに明らかになっているレコーディングは、レコード発売が意図されたセッションだけでも500曲以上、のちに世に出た放送用の録音などを含めると、後に800曲を超えている。ジャンゴがレコーディングを残したレーベルには、おもなものだけでもウルトラフォン、仏グラモフォン、仏コロムビア、HMV、英仏デッカ、スウィング、リズム（ベルギー）、ブルー・スターなどがあるが、ジャンゴ自身にはレコード・レーベルとの契約という概念がなかったようで、今ではこれらが千差万別に選曲されたコンピレーションCDが、さまざまなレーベルから出ている。また、同じ曲が何度もレコーディングされているので、CDの曲目表だけでは見分けがつかないというのもネック。その上、レコーディングから長い年月を経たことを理由に、著作権譲渡の規制を逃れた格安CD、格安ボックス・セットなどもあり、手をつけられない状態であることをお断りしておかなばならない。

ということで、まず手にすべきはフランス・ホット・クラブ・クインテットの音源ということになるのだが、たとえばアルバム・タイトルにクインテットの名があっても、ソロ名義などさまざまな音源が混じっているのが常

で、これもうまくいかない。しかしやはり、最初の1枚は34年12月のクインテットによる初録音、『ダイナ』など4曲（ウルトラフォン音源）を含むものにしたい。ということでは、現在BMGからリリースされている『不滅のジャンゴ・ラインハルト～スタンダード編』か。これはスタンダード曲のみの選曲だから、もう1枚『不滅のジャンゴ・ラインハルト～オリジナル編』もということになる。のちにヴォーグ・レーベル経由でリリースされた音源の最もエッセンス的な部分は、これで一応は揃う。

同じBMGからRCAレーベルで出ている『ジャンゴロジー』はタイトル曲や『マイナー・スウィング』など選曲が良く、かねてからの人気盤だが、ジャケットにクインテット名義でクレジットされているにも関わらず、実は49年のローマ録音。クラッペリは入っているが、他は現地のミュージシャン。アメリカ盤ではこれにボーナスを加えてリマスターしたバージョンが出ているので、できればそちらを。さらに選曲の良さということでは、ジャンゴ没後の55年に米RCAが編んだ『イン・メモリアム』がある。35年～39年の録音から、コールマン・ホーキンスとのセッションやクインテットでの演奏を含む魅力的なオリジナル・コンピレーション盤だ。

ブルーノートからは36年から48年までのスウィング・レーベルでのレコーディングから選曲した『Best of

Django Reinhardt』が出ている。選曲はどこかアメリカ向けだが、このレーベルだけでまとめたというのには面白い。後期のジャンゴは、仏パークレイ傘下のブルー・スター音源のCD2枚組『ブルー・スター・セッションズ』にまとめられているので、これをお薦めしたい。クラッペリのバイオリンでなく、こちらにはユベール・ロスタンのクラリネットがフィーチャーされ、初期の鬼気迫る演奏ではないけれど、晩年の円熟味が味わえる。

何枚もCDを買うハメになるのを危惧する向きには、いっそのことレーベルを越えた編集のボックス・セットしかないだろう。イギリスのJSPから出た『The Classic Early Recordings in Chronological Order』は、5枚組で、39年までの初期音源を網羅した決定的な編集。JSPからはこれを補完する内容の4枚組『Paris and London: 1937-1948』も出ており、ともに音質も良く、ボックスにしてはかなりの廉価だ。ボックスではジャンゴがアメリカのジャズメンと共演した音源を集めた3枚組の好企画『With His American Friends』も面白い。コールマン・ホーキンス、レックス・スチュワート、ベニー・カーターや、ジャズ・バイオリンのエディ・サウスらとの伝説的なセッションがたっぷり収められている。コンプリート・コレクションを目指す人には、ほぼ完璧なディスコグラフィ・サイト、<http://banjo.boyto.to/django/djangodiscography.html>がきっと役に立つはずだ。



『不滅のジャンゴ・ラインハルト～スタンダード編』
BMG フォンハウス BVUJ-7481



『不滅のジャンゴ・ラインハルト～オリジナル編』
BMG フォンハウス BVUJ-7482



『ジャンゴロジー』
BMG フォンハウス BVUJ-7332



『Djangology』
輸入盤



『イン・メモリアム』
BMG フォンハウス BVUJ-7333



『Best of Django Reinhardt』
輸入盤



『ブルー・スター・セッションズ』
ユニバーサル UICY-27481-2



『The Classic Early Recordings in Chronological Order』
輸入盤



『Paris and London: 1937-1948』
輸入盤



『With His American Friends』
輸入盤